

発信しよう当事者の思い ～パンジーメディアの挑戦

林淑美

知的障害をもつ人が自分たちの思いを発信するインターネット放送番組「きぼうのつばさ」をご存知ですか？「パンジーメディア」が1か月に1回発言し、この2月で18回目になります。

放送時間はおよそ50分。知的障害をもつ人が自分の歴史を語る「わたしの

歴史」、グループホームでの暮らしや、地域でのさまざまな活動など、一人ひ

番組づくりの主役は
知的障害をもつ人

パンジーメディアで一番大切にしていることは、知的障害をもつ人の視点です。2人のプロデューサーは知的障害者です。番組の内容が知的障害をもつ人たちの立場に立っているか、わかりやすい内容になっているかなどをチェックします。また、3人の知的障害者が撮影や音声を担当しています。キャスターをはじめ出演者も、ほとんどが知的障害をもつ人です。これまで出演回は50人を超えるました。

パンジーメディア

パンジーメディアの母体である社会

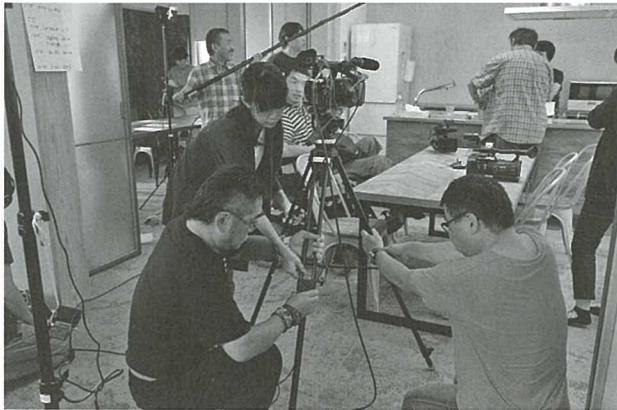
人が講演をしているのを目の当たりにして衝撃を受けました。これまで想像もできませんでした。帰国後、職員への講演の依頼を、知的障害をもつ人たちの講演に変えました。

しては全くの素人。初めての経験に誰もが慌てふためいたり失敗したりの連続で、何度も振り直してやつとOKになることもありました。職員の中には、落ち込み挫折する人もいました。

福祉法人創思苑は、知的障害をもつ人たちがどんなに障害が重くても地域で普通に暮らすことをを目指し、その支援のための事業を運営しています。そして、「知的障害をもっている人の思いを社会の人たちに知つてもらうにはどうしたらいいのだろう」が、開設以来のテーマです。

番組制作は発見の連續

2016年2月から準備が始まりました。第1回の放送は9月。これまでの2年間は、まるで地図のない道を歩いていたいるようでした。



パンジーキッチンの撮影準備

さを感じたのでしょうか、回を追うたびに、当事者は積極的になつていきました。仲間や職員、家族が自分を認めてくれてることを実感したのだと思います。番組に関わった当事者が、これほどまでに元気になるとは、想像していました。

また、「わたしの歴史」を話すことが、大きな意味があることに気づきました。最初の頃、「わたしの歴史」に出演したい人は、そつと「出たい」と伝えに来いました。Aさんもその一人です。そして、職員と一緒に始めた原稿づくり

また、「わたしの歴史」を話すことが、大きな意味があることに気づきました。最初の頃、「わたしの歴史」に出演したい人は、そつと「出たい」と伝えに来ていました。Aさんもその一人です。そして、職員と一緒に始めた原稿づくり



「わたしの歴史」の撮影

り。Aさんは戸惑いながら過去の苦しめたこと、どうしていいかわからなかつたことなど、これまで自分の中に閉じ込めていた思いを語ってくれました。台本が完成し、初めてカメラの前で自分の人生を語った後の晴れ晴れとした笑顔が印象的でした。

ところが完成試写会の日、Aさんは席に座つたものの顔をあげません。試写が終わり、大きな拍手がおき、仲間から「大変だつたなあ」と声をかけら

とAさんは

と気がつき、元気になつていることで

す。

映像の力・さまざま反響

パンジーメディアには、視聴者からさまざまな感想が寄せられました。

- 一人ひとりが苦労して喜んで生きて、そんな姿に涙が出そうでした。こんなふうに障害をもつた方のことを見るのは初めてです。
- 社会の中で自分の居場所があること、自分らしく輝ける場所があることは、大切なことだと改めて思いました。当たり前に地域で暮らす。自分の息子はどうだろうかと自問自答の毎日です。放送は私の背中を押してくれました。
- 今回の特集「ねがいはひとつ　あいされたい」は驚きました。当事者の皆さん的心の内を丁寧になぞり、一

れた時、顔をあげたAさんに笑顔がありました。

その後、歴史を話したい希望者が増え、みんなが積極的になつています。

そして、驚くことは、聞いている人も「私も同じだ。一人ではなかつたんだ」

いと思つてほし。そして、誰もが住みやすい社会になつてほし」と強く願つています。そのために、パンジーメディアの活動を全国に広めたい思つていて。その第一歩として、北海道や静岡の知的障害をもつ人が「わたしの歴史」に出演し、記者として活動を始めました。いつか、パンジーメディアの支局が全国に展開できる日を目指しています

(はやしよしみ クリエイティブハウ
ス「パンジーⅢ」)

人ひとりがこころを開いていく様子が自然に受け止められました。自分を受け入れる人生を始めることが大切さを改めて感じました。

パンジーメディアのこれから

私たちは「もつと知的障害をもつている人のことを知つてほしい。そして、誰もが住みやすい社会になつてほし」と強く願つています。そのため、パンジーメディアの活動を全国に広めたい思つていて。その第一歩として、北海道や静岡の知的障害をもつ人が「わたしの歴史」に出演し、記者として活動を始めました。いつか、パンジーメディアの支局が全国に展開できる